二〇一二年三月三一日

こうのとり飛来す里に風光る　有　香
占ひの館通りや春ともし　つくし
百千鳥小さき祠に鈴一つ　宏　虎
釣竿を伸べたる先に春の鴨　なつき
野地蔵の供花は菜の花づくしかな　菜　々
陽に映えて千の玉杯大木蓮　三　刀
落ち椿悲運の武士の墓どころ　よし子
白濁のフロントガラスよなぼこり　よし女
春疾風カート独りで走りだす　ぽんこ

二〇一二年三月三〇日

矢印に従ふ小道馬酔木咲く　あさこ
探梅行眼下に保津の川白し　雅　流
砂山を積んでは壊し磯遊び　わかば
綺羅の水脈曳きてお堀の春の鴨　あさこ

二〇一二年三月二九日

釈迦院の寂し庵や竹の秋　有　香
霾や音はすれども機影みず　雅　流
神鶏のしとねとなりし落椿　なつき
納骨の読経の聞く吾に春寒し　あさこ

二〇一二年三月二八日

自転車の少し大きめ山笑ふ　ともえ
ふところに大貯水ダム山笑ふ　三　刀
文教の道に筆塚百千鳥　よし子
菜の花の黄に埋もれたる中州かな　せいじ
春風に乗せて船頭唄ひけり　せいじ

二〇一二年三月二七日

また届く閉店通知春憂ふ　はく子
居留地に瓦斯灯点る朧かな　わかば
末黒野に佇ちて大阿蘇望みけり　せいじ
足湯する奥日光の梅固し　あおい
高垣をさせるは椿銀閣寺　あさこ
畦道をブルーに染めるいぬふぐり　こすもす
老鶯や胸突き八丁登りきて　きづな

二〇一二年三月二六日

天恵の風授かりて鳥帰る　宏　虎
陶器市目高ごと甕買ひにけり　なつき
遠まわりして囀れる道戻る　よし子
納骨を済ませし安堵京しぐれ　あさこ

二〇一二年三月二五日

干し物を狼藉したる春嵐　満　天
春耕の土塊付けて夫帰る　有　香
潮干狩りコンビナート一隅に　菜　々
須磨訪へば寿永の悲話の沖霞む　宏　虎

毎日句会みのる選・二〇一二年四月三日